

# ニュータウンの記憶をめぐる文化人類学的研究に向けて —向島ニュータウンにおける絵はがき展の事例から考える

山田 香織

## 1. はじめに

本論は京都市南部に位置するニュータウンにおいて2011年3月に開催された展覧会とその準備プロセスについて検証し、記憶の表象のあり方と、一研究者であり一大学関係者でありアウトサイダーである個人の表象のプロセスへの関わり方を検討することで、ニュータウンの記憶をめぐる文化人類学的研究の展望を探るものである。以下では、2011年の展覧会をおこなうに至った経緯、準備プロセス、展覧会の内容、そして、筆者のこの展覧会への関与の仕方について述べていく。

『文化人類学』第70号第4巻の特集「表象・介入・実践：人類学者と現地とのかかわり」の序において速水洋子は、人類学者とフィールドのかかわりについて、「人類学者、調査を始めた時点ですでに介入している」、「本来調査の初めから、成果を世に出した後まで、人類学者は現地社会と密接な関係に入り、それをとりまく世界のただ中にいる」と述べ、人類学者はフィールドと関わりもった時点で傍観者ではいられなくなると指摘している [速水 2006: 474]。筆者は本稿で取り上げる展覧会の開催に深くかかわった経緯がある。この展覧会をめぐる一連の動きのなかで、速水のいうところの「世界」のただなかに身をおく機会を得て、そのプロセスにおいて速水の指摘する状況を肌で感じる事ができた。

筆者はまた、この一連のプロセスにおいて、ここで挙げられた「密接な関係」のあり方について検討する機会を得た。密接な関係に基づいて得られた資料から紡ぎ出される文化人類学の成果のかたちのひとつが民族誌であることは改めて言うまでもないが、対象とする社会や地域

において人びとが自らを表象することを試みる場合、研究者はその活動にどのようなスタンスで、あるいはどのような密接さを持って関わるべきなのか。

以下本論では、ニュータウンにおける展覧会のプロセスとそこへの筆者の関わり方を詳述することで、対象社会の人びと自らの実践への人類学者の密接な関係のあり方について検討してみたい。

## 2. 30周年を迎えた向島ニュータウン

### 2-1. 向島ニュータウンの概観

日本のニュータウンは、第二次世界大戦後の高度経済成長の下、都市部に人口が集中した結果不足した住宅補充を目的として、都市郊外に建設された「新しい街」であり、向島ニュータウンは、京都市内南部の伏見区南部の、かつて豊臣秀吉ともゆかりのある二ノ丸池の干拓地である向島に造成された団地で、1970年代に建設がすすんだニュータウンである<sup>1</sup>。向島ニュータウンの一部を含む学区である二の丸北学区自治連合会発行の街史『わが街むかいじま』によれば、向島ニュータウン建設計画は1967年（昭和42年）に開始される。翌1968（昭43）年に地元説明会、1969（昭44）年に用地買収がなされ、1972（昭47）年3月に造成工事が、1974（昭49）年9月に2街区、1975（昭和50）年12月に5街区の住宅建設工事が着工し、1977（昭52）年4月に両街区の入居が開始する。その後は、1976（昭51）年に4街区と6街区、1977（昭52）年に3街区、1978（昭53）年に1街区、1979（昭54）年に8街区、1980（昭55年）年に7街区、1981（昭56）年に9街区、1982（昭57）年に10街区と、1年に一街

区のペースで住宅工事が着工していった。そして1987（昭62）年の11街区建設工事着工を最後に、向島ニュータウンは11の街区からなるニュータウンとなった。向島ニュータウンには、公団（都市再生機構 UR）住宅（6街区）と、市営住宅（1,5,8,9,10,11街区）、分譲住宅（2,3,4街区）が混在している。街区とは別のエリア区分としては小学校の学区があり、このニュータウンは藤の木学区、二の丸学区、二の丸北学区の3学区に分けられる。

向島ニュータウン売り出しに合わせて京都市住宅供給公社が作成したパンフレット『「向島ニュータウンご案内」』には、「ゆとりと暮らしやすさをテーマに、日々充実する街づくり」とのキャッチフレーズ、ニュータウンの航空写真を収めたページ、「都心なみの充実ぶり」と題して、ニュータウン内にある向島センター商店街に立ち並ぶスーパーマーケットや各種店舗を紹介するページ、各種医療機関や公共機関、教育施設、公園やスポーツ施設の充実ぶりをアピールするページが設けられている。ここから、ニュータウン建設にあたって、日常生活に必要と思われる各種機能をニュータウン内に整備した、文字通り「新たな街」がここに創出されたことがうかがえる。

2005（平17）年の統計資料によれば、ニュータウンの人口は1990（平成2）年の19,000人強をピークにその後徐々に減少をみせている。年齢層は、働き盛りの核家族世代がほぼ同一時期に入居したことから偏りがみられ、現在60代、70代の割合がとくに多い。一方、世帯数は、人口数とは異なる動向を見せており、1995（平7）年に約6,400世帯を数え、その後は増減を繰り返しながら6,000世帯以上を維持している（2005年現在）。

向島ニュータウンでは、街区ごとに自治会、街区内の棟ごとに管理組合や組合などが組織されている。また、いくつかの街区の自治会は共同の例会を定期的に行っている。このほか、学区ごとに組織されている自治連合会や各種組織、向島駅前の住環境の維持に取り組む向島駅前まちづくり協議会などがある。

## 2-2. 30周年と記念イベント

上述のとおり向島ニュータウンは街区によって住宅建設時期が少しずつ異なるため、周年のある特定の年一年に限定することはできないが、2010年、向島駅前に面した街区の住民を中心に構成される向島駅前まちづくり協議会（以下、まちづくり協議会）会長の福井義定氏は、ニュータウンのお祭り運営やゴミ拾い活動などで数年来つながりのあった京都文教大学の人間学研究所共同研究プロジェクト『リバイビング・ニュータウン』（以下、ニュータウン研究会）に対して、翌年（2011年）の向島ニュータウン30周年記念イベントへの協力要請の話をもちかけた。これに対して同研究会は、まちづくり協議会と京都市向島図書館との協働の「向島ニュータウン思い出の絵はがき展」の実施を提案した<sup>2</sup>。

30年という月日は人の営みでいうと一世代分と言われる。30年分の自らの経験や記憶を思い返してみると、誰しも、さまざまな出来事や思い出の場面を思い浮かべることができるのではないだろうか。では、「まち」という単位ではどうなのだろう。ひとは、まちの30年のあゆみや、まちでの暮らしをどう捉えるのだろうか。しかも、それまでまちとしての歴史を持たないニュータウンにおいて、まちの記憶、まちにまつわる思い出はどう蓄積されていくのだろうか。

ニュータウンの建物を眺めているだけだと、その大きさと均質性に圧倒され、ニュータウンというまちの暮らしまでもが無機質で均質的であるかのようなイメージを抱いてしまう。しかし、そこには、戸数の数だけの家族の営みがあり、30年という歳月の流れのなかで、少しずつ蓄積されたまちの記憶があるのではないだろうか。それを形にしてみよう。そんな思いから実現したのが、住民から思い出の写真を借りて、写真データをスキャンし、絵はがきサイズの用紙に出力し、それを台紙に貼りつけ、それぞれにキャプションをつけ、向島図書館に展示をして、来館者に鑑賞してもらおう、というこのプロジェクトであった。

30周年記念事業として絵はがき展示を実施するに至った背景には、こうした意図のほかに、京都文教大学文化人類学科の西川祐子教授（当

時)が、担当する授業「ジェンダーと文化演習」(以下、西川ゼミ)で、2004年度と2005年度に向島ニュータウンと隣接する槇島グリーンタウンをモチーフとした絵はがき制作に取り組んだことがある。学生たちは、1年のあいだに、向島ニュータウンと槇島グリーンタウンで思い思いの写真を撮影し、授業内で習得したパソコンスキルを駆使して、編集・加工し、アート作品として仕上げ、学内展覧会で披露することを繰り返した<sup>3</sup>。2011年の「思い出の絵はがき展」は、住民から提供してもらった写真に加工や編集を加えることはなかったが、このプロジェクトを参考しながら展開された<sup>4</sup>。

### 3. 展示

#### 3-1. 展覧会の概要

展覧会の準備プロセスについては次章でふれることとし、ここではまず、展示の様子をおさえておきたい。

写真1は、展示の様子を収めたものである。展覧会は、2011年3月9日から1か月の会期で実施した<sup>5</sup>。場所は京都市向島図書館で、図書館のエントランスホールに設置されている掲示板を使用した。展示にあたっては、ニュータウン年表を作成し、その周囲を囲むように絵はがきを年代順に配置するとともに、掲示板の下に机を用意し、そこにパノラマサイズの写真や京都市住宅供給公社よりご提供いただいたパンフレットの一部を抜粋して作成した絵はがきを展示した。また、以下の趣旨説明文も掲示した。



写真1

向島ニュータウンは今年で30周年を迎えます。向島駅前まちづくり協議会、京都市向島図書館、京都文教大学人間学研究所「リバイビング・ニュータウン」研究会はこれを記念して、ニュータウンの思い出絵はがき展を開催することにしました。

ここに展示している作品の大半は、向島ニュータウンにお住まいの方たちからご提供いただいた写真を絵はがきにしましたものです。ニュータウンにお住まいの方には懐かしい場面を収めたはがきが多数あると思います。

この展示が、みなさんがニュータウンにまつわるできごとを思い出す機会となれば幸いです。

#### 3-2. 展示作品

展覧会実施に先立って、ニュータウン研究会とまちづくり協議会はニュータウンの思い出写真の提供を住民に募った。募集にあたっては、展覧会開始の約1か月前に、向島図書館の書籍貸借カウンターに、絵はがき展の概略と写真提供の依頼を記した貼り紙をした写真投函用ポストと封筒を設置した。また、写真募集を周知するポスターをまちづくり協議会会長の福井氏から各街区各棟自治会長もしくは管理組合長に配布してもらい、各棟の集合掲示板に掲示してもらった。

その結果、ニュータウンに居住する9名の方と2つの管理組合から計84枚の写真をお借りすることができたほか、向島図書館長のご配慮で、京都市住宅供給公社が保管する向島ニュータウン販売当時のパンフレットや間取り図を展覧会にお借りすることもできた。展示用の絵はがきデータは、100点近くとなり、実際の展示には、このなかから70枚弱を使用した。

図表1は、集まった写真を年代順に並べたものである。紙幅の関係上、個々の写真についてみていくことは難しいので、ここでは、提供された写真(=絵はがき)の傾向を年代ごとに押さえることにする。

まず、1970年代(展示数10点)は、更地の3街区エリア(向島駅前)、建設途中の向島駅や向島中学校、当時運行していた折り返し路線バ

スなど、ニュータウン建設以前の建設予定地の様子や、まちの機能が整備されていくプロセスをうかがい知ることのできる写真（＝絵はがき）が多い。続く、1980年代（展示数13点）は、子どもたちが集会所いっばいに集まっている様子、夏祭りで映画や魚釣りゲームを楽しむ様子、ラジオ体操をする子どもたち、各街区の区民運動会、入居から数年後のニュータウンの風景写真が提供された。80年代の写真は、ニュータウンの子どもを取めたものが多く、しかも、その数の多さが印象的である。1990年代（展示数16点）の絵はがきは、親子キャンプや夏祭り、小学校でのバザー、自主防災会による防火の集い、有志によるバーベキュー、冬祭り、もちつき大会、第一回シルバー茶話会の様子を取めたもので、小学生向けのイベントに加えて、大人と子どもが楽しめるイベントが、街区単位、棟単位で企画されたことをうかがい知ることができる。また、ニュータウンに暮らす高齢者向けの催しの写真が初めて登場した。2000年代（展示数20点）の写真は、集会所での日韓ワールドカップの日本代表チームの応援、夏祭り、防災訓練、憲法九条向島ニュータウンの集い、老人クラブグランドゴルフ記録会、向島秋の祭典の様子や、ニュータウンの四季を取めたもので、子どもの姿を取めた写真はほとんど見られなくなり、多様な世代の多様なイベントが開催されていたことを読み取ることができる。

### 3-3. 来館者の反応とその後

展覧会期間中、展示コーナーには観覧者にコメントを残してもらえよう、ノートと絵はがきに張り付けられる付箋とペンを準備しておいた。また、年表の加筆修正も自由におこなってもらえるようにした。その結果、数はそれほど多くなかったが、子どもたちが感想を書いて付箋を絵はがきに貼ったり、来館者がノートにコメントを残してくれた。以下は、ノートに記された感想である。

向島ニュータウン30年。30年は歴史だなーと感慨ひとしお。写真は何も言いませんが、一目で移り変わりがうかがえます。

図書館の隣にある愛隣館から遊びに来ました。今とは違う昔の向島の写真に、皆で「おー、こんなやったんやー」と驚いてみました。

この街の成長ははかりしれません。

昔は野原だったのに、マンションや団地などの集合住宅と教育施設、スーパーなどの商業施設、高齢者や、身体の不自由な人が入所、通所する福祉施設。憩いの場の公園。道路や水道などのインフラ施設。

そして最も忘れてはならない医療機関や消防・警察の施設。人々が快適に暮らす為の様々な施設がありますが、やっぱり街づくりの主役は、ほかならない住民のみなさんであり、今までも、そしてこれからも命を育み、災害や事故から守り助け合っていくことができる街になることを願っています。

この展覧会で使用した絵はがきは、その後、この年の11月に向島センター商店街で開催された第5回向島秋の祭典でも展示され、青空の下、来場者や商店街の買い物客の眼を楽しませた。なかには足を止めて、絵はがき写真をじっくり見ていく人もいた。

## 4. 考察：絵はがき展示の実践からみえてくるもの

### 4-1. 記憶のかたちを表すことはできたのか

「思い出の絵はがき展」は、ニュータウンというまちの記憶をかたちにすることを意図したプロジェクトだった。まちの記憶をかたちにするにあたっては、住民の視点を重視し、住民が所有するニュータウンにまつわる写真を一般公募で募り、それを絵はがきに加工し、展示した。

このプロジェクトを西川ゼミの絵はがきプロジェクトと比較すると、双方とも絵はがき制作—ニュータウンにまつわる場面を切り取り、それをはがきというかたちで表現する—という手法を用いている点では同じであるが、西川ゼミの方はニュータウンをモチーフにした芸術作品の創出を目指していたとあってよいだろう。他方、「思い出の絵はがき展」は住民のニュータ

ウンにまつわる生の記憶を、コラージュのかたちで表現することを試みている。また、両プロジェクトをニュータウンへの接近法、あるいは「視点」という角度から比較すると、前者を「アウトサイダー」の視点から捉えたニュータウンの姿の表現、後者を、住民、つまり「インサイダー」の視点からみたニュータウンの表現と特徴づけられる。

展覧会主催者はこのプロジェクトを、向島ニュータウン30周年記念イベントとして適当な時期に開催できたことを評価している。また、まちづくり協議会、向島図書館、そして、京都文教大学ニュータウン研究会が協働でニュータウンにかかわるプロジェクトを実施できたことから、民・(広い意味での)官・学の連携の可能性を探ることができた点に、このプロジェクトに意義を見出している。

しかし、ここで先述の本展覧会のねらいに戻ってみたい。主催者は、絵はがき展示を通して、向島ニュータウンのまちの記憶の蓄積のありようを検証できたのだろうか。蓄積を確認できたとするならば、この展示において、記憶が蓄積されていることを観覧者に伝えることはできたのだろうか。

本論では概観の記述にとどまったが、われわれは上述のとおり、展示された絵はがきに、ニュータウンというまちの記憶をたどるための手がかりがあることを推察できる。たとえば、絵はがきを通じて1970年代から時代たどると、ニュータウンのハード・ソフトの両側面が徐々に充実していったことを読み取ることができる。また、80年代、90年代、2000年代の絵はがきからは、ニュータウンに暮らす人びとが、まつりや集いを繰り返し協同でおこない、近所づきあいをしていることを見て取ることができる。そこに人びとの暮らしがあり、住民がニュータウン開設以来この空間に魂を吹き込み、まちを創造してきたことを想像することができる。あるいは、絵はがきを住宅供給公社のパンフレットの挿入写真にあるニュータウンの姿と比較してみると、パンフレットの方は、当初理想とされた家族像やニュータウンが描かれているものの、どこか無機質な印象を受ける一方、住民提供の

絵はがきの方には、ニュータウンに暮らす人びとの生の実践・営みとそれにまつわる物語の存在を感じ取ることができる。絵はがき、ひいては思い出写真は、まちの記憶を探る重要な手がかりといえるだろう。

しかしながら、展覧会来場者のコメントにもあったように、絵はがきや写真それ自体は何も語らない。絵はがきを観察するだけでは、ニュータウンの住民がニュータウンにまつわる写真に収められたできごとや実践をまちの記憶と捉えているのか、住民がその記憶を共有しているかどうかを判断することは難しい。また先に述べた、絵はがきから読み取ったニュータウンの様態や変化は現時点においては、あくまでも筆者の推察の域を出ないものである。裏を返せば、ニュータウンの住民が同じ写真をみたとき、全く異なる解釈をすることも十分にありうるのである。

また、今回展示に使用した写真提供者は、9名の住民と、2つの棟の管理組合、そして、住宅供給公社に限られている。詳しいデータはないが、写真を多数貸与してくれた住民は、おそらく60代、70代の男性であると思われる。つまり、ニュータウン建設当時から2000年代までのニュータウン写真、とくに、ニュータウンにまつわる行事に関する写真は、彼らがかかわった行事であるだろうから、今回展示した絵はがきは、正確には、現在60代、70代の男性の向島ニュータウンにまつわる記憶のコラージュであり、必ずしも、すべての住民の思い出や記憶を代弁するものとは言い難い。

さらに、絵はがき用データの選定に関しては、管理組合が保管する写真、住宅供給公社より提供いただいた資料はその数が膨大であったため、絵はがきを作成する前に選定をおこなったのだが、今回、このプロセスに住民はかかわっておらず、この展覧会の準備に携わったニュータウンのアウトサイダーである筆者がおこなった。また、住民からお借りした写真についても、データはすべて保存し、絵はがきの形式にしたが、展示作品の選定は、同じく筆者がおこなった。

以上から、絵はがきに収められた事象からは、ニュータウンというまちにおいて記憶が蓄積さ

れていると推察することはできるが、この展覧会の絵はがき写真の提供者の偏りやアウトサイダーによる絵はがき選定という状況は、ニュータウンの記憶とその蓄積のありようの検証が十分になされていないことを浮き彫りにする。今回の展覧会では記憶の蓄積の提示には至っておらず、観覧者に対するインパクトは、ニュータウンにまつわる記憶の覚醒と、ニュータウンの歴史にまつわる知見の提供にとどまっていたと捉えるのがよいだろう。

#### 4-2. 誰が何／誰のためにニュータウンの記憶をかたちにするのか

ここでもう一度、このプロジェクトへの筆者の関与の仕方を振り返っておきたい。

このプロジェクトは、民・(広い意味での) 官・学の協働の可能性を探る好機であったといえる。しかし、今回、展示作品の選定を筆者が中心におこなった点に注目すれば、実施目的に合った展覧会を創造するための三者の協働については、よりよいかたちがあったのではないかと考えられる。

筆者は今回、これら三者のなかの学の立場で関わった。筆者が所属する大学では、向島ニュータウンをフィールドとした教育を主眼に据えた地域連携活動や、調査研究活動を展開しており、筆者も少なからずその活動に関わってきた。しかし、ニュータウンとの関係ということでは、筆者はあくまでもアウトサイダーである。今回の展覧会がかたちづくろうとしたものは、市民の視点から捉えたニュータウンの記憶であった。インサイダーである住民が写真や資料を提供してくれたとしても、絵はがき写真や関連資料の選定を筆者が主体的に行っているのは、絵はがき展で提示される記憶は、アウトサイダーが捉えたそれにすぎないだろう。筆者は、ニュータウンの記憶をかたちづくる部分の肝でもある写真選定に工夫を加えるべきだっただろう。住民の声に耳を傾け、住民の選択を活かすコーディネーター役に徹するべきだったのではないだろうか。

#### 5. おわりに

さいごに、このプロジェクトの次なる展開の可能性を提示しておきたい。

前章でもふれたように、今回の「思い出の絵はがき展」は、実施したことそれ自体には大きな意味があったといえる。しかしその一方で、準備とアウトプットの手法に関しては、前章の考察を通じて2つの課題があったことが浮き彫りとなってきた。ひとつめの課題は、絵はがき写真その自体は何も語らないということ、つまり、絵はがき展示だけでは、ニュータウンの記憶の十分な表象、記憶の蓄積の表象に至らないということである。住民が提供してくれた(絵はがき)写真は、ニュータウンの記憶とその蓄積の様態を探るためのメディアとして非常に有効である。しかし、住民の記憶について、あるいは、彼らのまちに関する記憶の共有や蓄積の様態について考え、表象するには、もう一步踏み込み、この写真を手がかりとして、個々の住民の写真の解釈、写真にまつわる記憶や語りに耳を傾けていく必要があるだろう。

嘉田由紀子は、論考「都市化にともなう環境認識の変遷」において、琵琶湖周辺に暮らす人びとの自然や水をめぐる生活ぶりの変化に関する事例をもとに環境認識について論じているが、嘉田は、琵琶湖周辺に暮らす人びとへの生活の変化に関する聞き取りをおこなう際、写真を使用している [嘉田 1997]。嘉田は、都市化される以前の琵琶湖の写真、人びとの琵琶湖の水利用の回想のための手がかりとして用いており、聞き取りの際の写真使用の有用性について、生活習慣は生活の中に埋め込まれており、言葉では表現しにくい、写真は、表現しにくい言葉を紡ぎ出す手助けとして非常に効果的であると指摘している [嘉田 1997: 49-52]。嘉田はまた写真を、彼らが紡ぎ出す言葉の裏づけや、言葉を補足するためのツールとしても活用している。

嘉田のこの手法は、今回の展覧会で集めた写真データを活用したニュータウンの記憶をさぐる手がかりとなりうる。また、写真を手がかりとして語りを引き出すこの手法は、今回の展覧会の写真データ提供者の少なさに関する課題の解決の糸口にもなるだろう。つまり、提供され

た写真を記憶をたどる手がかりと位置づけ、所有者に限定せず住民に聞き取りをおこなえば、ニュータウンの記憶とその蓄積のありようを検証できるのではないだろうか。

絵はがき展にまつわるふたつめの課題は、筆者のこのプロジェクトへの関与の仕方についてである。西川祐子は、日本都市社会学年報の特集論文「ニュータウンの記憶のゆくえ—高蔵寺ニュータウンの地域メディア変遷の事例からの考察—」のさいごで、ニュータウンの記憶の特徴をまとめており、第3の特徴として、「ニュータウンの記憶は、現在のところ個人個人の記憶の自発的な持ち寄りによって構成されている」と論じている〔西川 2009:35〕。西川のこの指摘は、ニュータウンの記憶は、あくまでも個人、つまりは、ニュータウンの住民によって構成されていることを示唆する。また、博物館展示などでの自／異文化表象に関する議論では、展示物を使用する文化を営む人びとの立場に対する配慮の必要性が指摘されている〔cf. 久留島 2008: 213-243〕。博物館の展示とは比べものにならない規模であり、かつモノの展示ではなかったとはいえ、今回の絵はがきプロジェクトにおいてもこの点は配慮すべきで、アウトサイダーとして本展覧会に関わった筆者は、ニュータウン住民自らの記憶の表象を手助けする立場に立つべきだったのだろう。

『文化人類学』72号第2巻の特集「大学—地域連携時代の文化人類学」論文「地域で学ぶ、地域でつなぐ—宇治市における文化人類学的活動と教育の実践」で森正美は、文化人類学がまちづくりや地域づくりにおいて強みを発揮できるのは「調査と記録、情報収集と伝達、コミュニケーションを促進する仕組みづくり」においてであると指摘する〔森 2007: 215〕。人類学的実践においては「ときには地域内部のネットワークの結節点として、また地域内外の媒介項としての役割を担う自覚が求められるだろう」とも述べている〔森 ibid.〕。森の指摘にしたがえば、人類学的立場に立ちながら本稿で論じてきたプロジェクトにかかわる場合、次なる段階で力点を置くべき点は、ニュータウンの記憶にまつわる調査と記録である。そして、筆者が担いうる

べき役割は、記憶を紡ぐためのネットワークの結節点をつくりだすことであり、地域内外の媒介項となることといえる。ニュータウンの記憶をめぐる人類学的実践にあたっては、冒頭で筆者が問いとして挙げたフィールドとする社会に暮らす人びとの密接のあり方の意識化よりも、こうした立場の意識化の方が重要なだろう。

## 謝辞

本稿で取り上げた「思い出の絵はがき展」への筆者の関与は、京都文教大学人間学研究所共同研究プロジェクト『リバイビング・ニュータウン』のメンバーとして、同大学のニュータウン研究活動に参加する機会を与えていただいたことで実現した。また、展覧会の準備・運営に携わらせていただけたことを、同研究会メンバーならびに、向島ニュータウンまちづくり協議会のメンバーの方々、向島図書館長に心から御礼申し上げます。

## 参考文献

- 宇治市教育委員会 1991 『巨椋池』宇治市歴史資料館。
- 巨椋池土地改良区 2001 『巨椋池干拓六十年史』。
- 巨椋池土地改良区（追補再版）1981 『巨椋池干拓誌』。
- 嘉田由紀子 1997 「都市化にともなう環境認識の変遷」青木保・内堀基光ほか編『環境の人類誌』岩波講座文化人類学第2巻、岩波書店、41-75頁。
- 京都市住宅供給公社 『向島ニュータウンご案内』パンフレット。
- 久留島浩 2008 「「異文化を展示すること・「自文化」を展示すること—歴博と大英博物館の「対外関係」の展示プランを比較して」『国立歴史民俗博物館研究報告』140号、201-211頁。
- 西川祐子 2009 「ニュータウンの記憶のゆくえ—高蔵寺ニュータウンの地域メディア変遷の事例からの考察」『日本都市社会学年報』27号、21-36頁。
- 2005年度西川ゼミ 2006 『「文化人類学演習Ⅱ 町の絵ハガキ作りますプロジェクト」報告書』京都文教大学西川祐子ゼミ。
- 速水洋子 2006 「〈特集〉表象・介入・実践：人類学者と現地とのかかわり 序にかえて」『文化人類学』第70号第3巻、473-483頁。
- 森正美 2007 「〈特集〉大学—地域連携時代の文化人類学 地域で学ぶ、地域でつなぐ—宇治市における文化人類学的活動と教育の実践」『文化人類

学』72号2巻、201-220頁。

『わが街むかいじま』街史編纂 1991 『わが街むかいじま』二の丸北学区自治会連合会。

第4回京都市住宅審議会資料 資料29「ニュータウンの人口世帯数等」 <http://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/cmsfiles/contents/0000064/64659/siryous2sannkou26-33.pdf> (2013年3月6日閲覧)

## 注

- 1 ニノ丸池は、かつて巨椋池（おぐらいけ）の一部であったが、豊田秀吉が伏見城築城にともなう宇治川改修工事で築いた小倉堤によって分断された経緯をもつ。また、巨椋池（二の丸池を含む）干拓は昭和初期に、わが国初の国営干拓事業としてすすめられた。
- 2 この年は、京都文教大学人間学部（現：総合社会学部）文化人類学科3回生の演習である「実践人類学実習」（担当：杉本星子教授）の受講生が父の日にあわせて「ほっこりフェスタ」を向島ニュータウン商店街の空き店舗とその周辺を借りて実施したり、4回目を迎えた向島ニュータウンの秋祭り（向島秋の祭典）の会場が、向島駅前にある中央公園から、ニュータウン全体の中心部といえる向島ニュータウンセンター街に変更された。
- 3 西川は、同プロジェクトの成果報告書のなかで、この取組の意図として、2つの問いかけをしている。一つは、京都文教大学生の大学周辺についての学びに関するものである。西川は、「4年間の大学生活のあいだ、毎日二つのニュータウンを巡っているわけです。高層集合住宅の白い壁が朝の陽光をうけて輝いている、夕刻には無数の窓の一つ一つと明かりが灯ってゆく。見慣れた、ひと懐かしく感じられる光景です。でも、わたしたちは自分が生活しているニュータウンをよく知っているのでしょうか。」と問いかけ、向島ニュータウンや横島グリーンタウンとは目と鼻の先の位置関係にあり、広義にとらえれば、ニュータウンの一部とも捉えられる京都文教大学の学生が、ニュータウンを知る、学ぶことに意味を見出している。そして、もう一つは、ニュータウン風景に着目することの意味についてである。西川は、同成果報告書のなかで、次のようにも述べているのである。「全国のニュータウンは1960年代の終わりに企画され、その多くは1970年代に建設されました。わたしたちの中にも現に各地のニュータウンに住んできた人、現在も住んでいる人が数多くいます。だのに、例えば日本百景が選ばれるとき、ニュータウン風景がとりいれられることは少ないです。団地やニュータウンが舞台となった絵本を探してみました。これもあまりない。名所旧跡の絵はがきはたくさん売られているが、ニュータウン風景はなぜ絵はがきにならないのだろう。モダンデザインのまちであるニュータウンはカメラアイにとっては、季節や時刻によってさまざまな表情をかえる魅力的な被写体です。」[2005年度西川ゼミ 2006:5]
- 4 京都文教大学生のニュータウンにまつわる絵はがき制作には、西川ゼミでの実践のほか、2010年秋学期に、文化人類学科杉本星子教授担当の実習（実践人類学実習）の受講生が取り組んでいる。実習受講生は、自ら撮影した向島ニュータウンの写真に絵はがきにし、11月に開催された向島秋の祭典で販売を試みた。この取り組みも、絵はがき展実施に向けた足がかりのひとつとなった。
- 5 好評だったということと、彩り鮮やかということ、会期は1か月延長された。

図表1 絵はがき展展示作品一覧

年代	展示 総数	絵はがきのキャプション（年月・できごと） できごとに下線を付したものは、写真内容より筆者が 便宜的にタイトルをつけたもの	向島 NT の主な出来事 （絵はがき展展示年表より）
不明		・ 3街区 A 棟入居前	
1970	10点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1975年9月 向島南（現・二の丸北）小学校</li> <li>・ 1975年9月2街区ベランダから撮影</li> <li>・ 1975年9月 現在の向島駅付近</li> <li>・ 1976年6月 2街区（現在のローソン付近から）</li> <li>・ 1976年6月2街区（5街区付近から撮影）</li> <li>・ 1977年頃 1街区建設中</li> <li>・ 1977年頃 中央公園完成直後</li> <li>・ 1977年頃 1街区未完成</li> <li>・ 1978年7月 向島ニュータウン（現・3街区）建設開始</li> <li>・ 1978年7月 建設中の1街区と向島中学校</li> <li>・ 1978年7月 現在の向島図書館付近と愛隣館</li> <li>・ 1978年7月 3街区建設中</li> <li>・ 1978年7月 完成間近の3街区と折り返しバス</li> <li>・ 1978年7月 向島建設中</li> <li>・ 1978年7月 戸建てエリアの様子</li> </ul>	2街区と5街区（1977年4月）、4街区と6街区（1978年4月）で入居開始。 野百合保育園、空の鳥幼稚園、向島幼稚園開園、向島南小学校、向島南小学校東分校（現・向島二の丸小学校）開校。 児童公園開園、医療機関・スーパーマーケット・郵便局開設、向島駅開業。
1980	13点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1980年 5街区集会所にて（<u>子供向けイベント</u>）</li> <li>・ 1981年 5街区ソフトボール大会</li> <li>・ 1981年 5街区運動会</li> <li>・ 1981年8月 <u>土地付きテラスハウスエリア道路で子どもたちが水浴び</u></li> <li>・ 1981年11月 <u>土地付きテラスハウスエリアの様子</u></li> <li>・ 1982年5月 <u>小学校運動会</u></li> <li>・ 1983年12月 大雪</li> <li>・ 1984年1月 入居3年2か月後</li> <li>・ 1984年8月 3B 棟夏祭り映画祭</li> <li>・ 1985年7月 3B 棟ラジオ体操</li> <li>・ 1986年8月 3B 棟夏祭り</li> <li>・ 1987年10月 第1回二の丸北区民運動会</li> <li>・ 1988年9月 二の丸北区民運動会</li> <li>・ 1989年7月 向島二の丸北小学校3B 棟キャンプ</li> </ul>	ふじのき幼稚園・城南保育園、城南第二保育園開園、向島小学校東分校（現・向島藤木小学校）、二の丸北小学校、向島中学校、向島東中学校開校、京都市営地下鉄向島駅へ乗り入れ、産婦人科・耳鼻科・歯科・外科医院、接骨医院、眼科医院開院、京都市立向島図書館開館
1990	16点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1990年7月 子どもキャンプ会</li> <li>・ 1991年11月 <u>ニュータウン遠景</u></li> <li>・ 1991年11月 WAIWAI' 91ほぶらフェスティバル</li> <li>・ 1991年12月 D 棟恒例もちつき大会</li> <li>・ 1992年7月 D 棟親子キャンプ（二ノ丸北小）</li> <li>・ 1992年9月 3B 棟有志背割り堤バーベキュー</li> <li>・ 1993年12月 二の丸北自主防災会「防火のつどい」</li> <li>・ 1994年2月 向島二の丸北小学校バザー</li> <li>・ 1994年12月 A 棟大規模修繕工事竣工式</li> <li>・ 1996年9月 D 棟敬老会</li> <li>・ 1997年12月 冬祭り 築山</li> <li>・ 1997年8月 夏祭り</li> <li>・ 1997年12月 冬祭り 築山イルミネーション</li> <li>・ 1998年7月 第1回シルバー茶話会</li> <li>・ 1999年7月 七夕</li> </ul>	障がい者デイサービス事業開始、愛隣デイサービスセンター、向島証明書発行コーナー開設

2000 ～ 2010	20点  ・ 2002年6月 W 杯サッカー日韓大会(日本 VS チュニジア)応援(3街区B棟集会所) ・ 2002年8月 夏祭り ・ 2004～2006年 小学生の友達と撮影。いまではみんな高校生。 ・ 2006年10月 朝霧(3街区B棟ベランダより) ・ 2008年2月 夜景(3街区B棟ベランダより) ・ 2008年2月 雪景色 ・ 2008年9月 向島中央運動公園 楽生会老人クラブグランドゴルフ記録会 ・ 2009年4月 春(3街区B棟ベランダより) ・ 2008年11月 紅葉(3街区B棟ベランダより) ・ 2010年9月 二の丸北小学校二の丸北総合防災訓練 ・ 2010年10月 憲法9条向島ニュータウンのつどい ・ 2010年11月 向島中央公園西「秋の祭典」前日舞台設営 ・ 2010年11月 向島中央公園西「秋の祭典」 ・ 2010年11月 向島中央公園西「秋の祭典」3G棟もちつき隊 ・ 2010年11月 向島中央公園西「秋の祭典」向島二の丸小学校吹奏楽部演奏 ・ 2010年11月 向島中央公園西「秋の祭典」京都文教大学よさこいソーラン ・ 2010年11月 向島中央公園西「秋の祭典」巨椋池干拓地環境保全ワークショップ田んぼ探検隊	向島駅前まちづくり協議会結成、向島駅前まちづくり憲章制定、向島駅前「春の祭典」「秋の祭典」の実施
	7点  ・ パンフレット「向島ニュータウンご案内」からの抜粋 ・ パンフレット「向島ニュータウン 土地付テラスハウスの募集」からの抜粋	